
龍の血を引く使い魔

水精靈騎士隊式等兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の血を引く使い魔

【Zコード】

Z4343BA

【作者名】

水精靈騎士隊式等兵

【あらすじ】

転生してチート能力を貰つてゼロ魔の世界に行くことになつたオーリ主。彼の物語を覗いていく話です。・・・ 作者は原作知識無です・・・

転生（前書き）

何卒温かい目で見て下さー

転生

「どうも。俺は死にました
なんといつありきたりな展開

「お前を転生させてやるつ

で、転生したいんだけど

「どうがいい?」

ゼロ魔の世界で

「分かった。能力は?」

チート? もうえるみたいで

「そりゃから誰に話している?」

気にしないで

「そりゃ?」

じゃあ、能力は黒龍に変身と精霊の力的な闇魔法が使える。

「闇魔法?」

死靈術ぽいやつ

「分かった。精霊の力は？」

入れといて

「エルフになるけどよいのか？」

それは困る、なんか適当に新しく使い魔的ににして

「分かった」

逝ってきます

「逝つてらつしゃい」

穴に落ちるとコントラクト・サーヴァントに呼ばれて吸い込まれた

俺のご主人は……え？ オリキヤラ？（前書き）

原作を既に崩壊しています。

嫌な方は『戻る』を押してください

オリキヤラ（女）。

名：チエルシー・オルガ・ド・シユバルツ

新たにやつてきたオリ主のご主人。

シユバルツ家2女の妹である。

現在ヴァイス家と対立する仲であるが幼馴染の友人がいる

俺のこ主人は……え？オリキキャラ？

光を潜り抜けるとそこにはたくさん的人がいた

ドンッ！

と落ちた。

痛テテと声を上げるが

土煙が舞つて声が聞こえなかつた。

その間に改めて俺の姿を見る。

やつぱり人間だが手足の先には龍の腕の様な鱗を纏つてゐる。（後に消せると分かつた）

ついでに尻尾もある。しかも黒龍に変身できるからそれは黒く覆われていた。

顔はいい方なのか？髪が黒髪

「「「ハハハハハハツ」」

不意に皆が笑つた。

「まさか、ゼロのルイズに続いてチャエルシーが出すとは思つて無かつた」

「「「ハハハハツ」」

なんか俺の姿を見ても変わらないらしい…あのヒラガ・サイトと…。主人であろうチャエルシーはあわあわしている

・・・胸がシエスタクラスとは…ゲフングフン

まあ、いいや馬鹿にしているつてことは
殺つてもいいか

俺は精霊の力を使い近くにいたギーシュを軽く燃やした

「熱いつ！」

体が燃えたように感じたのだろう
とても痛がっている…ざまあ見ろ

「ククク」

不意に笑ったのか他の貴族共が怖がった
チエルシーだけはあっけに捕われていたが…

「と、とりあえず儀式を続けましょう」

「はいっ！」

コルベール先生?が続けるようとする
威勢よく主人は返事をした

なんか

あれやるのか…照れるな
表には出さずに心で照れて置く

俺の顔に手を添えて

「あ、まつて」

「「「え?」「」」

いきなり俺が喋つたので驚いたのだろう
でチエルシーは

「なんですか?」

しつかり答えてくれました。

「(?)主人の名前何?」

「あ、すいません私の名前はチエルシー・オルガ・ド・シュバルツ
です」

「分かつた」

改めて、顔に手を添えて

「我が名はチエルシー・オルガ・ド・シュバルツ。五つの力を司る
ペンタゴン。この者に祝福を与える、私の使い魔と成せ」

唇に直接キスをする

・・・邪な気持ちなんて考えてませんからね

体が不意に熱くなつて行く。

多分ルーンが刻まれている
ルーンを探すと左頬へと何か書かれていた

そこで、俺は気を失つた。

体を覆つていいる黒龍の鱗が消えていった。
俺はそれを半龍化と名付けることにする

「ん？」

とりあえず目が覚めた。

恐らくチャルシーの部屋だろうつ

「あ、目が覚めましたか？」

「うむ」

「良かつた大丈夫でしたか？」

安堵したように聞く

確かにいきなり気を失くしたから当然か

「大丈夫」

「そうですか」

改めて主人を見る

寝間着？がとても可愛らしい、そして胸がデカい

「?.どうしました？」

見過ぎたのか俺に聞いてきた主人

「なんでもない、ご主人」

ドタドタドタドタッ！

「なんでじょう、外が騒がしいですね」

「俺が見てくるご主人」

多分サイトだ、後ご主人って呼ばないと行けないよね

「分かりました、でもあんまり遠く行きすぎないようにしてくさい

「了解」

なんて、優しいご主人様なのだろうか
表では無（今は）だが、内心デレデレである

と思っている同時にサイトを（面白そつだから）捕まえに行く

外にでて待ち伏せをする

そして精霊の力的な死霊術を使う

俺の周りに現れたのが六体の各武器がそれぞれ違う骸骨の死霊が現

れる

その死靈の回りには蒼い鬼火で3つ漂っている

六体の死靈は、剣・二丁銃・斧・銃剣・槍・大鎌を持っている

さて、どうやって使えるのかな

実験と共にサイトで試してあげよう

俺のこ主人は……え? オリキャラ? (後書き)

次話に会いましょう

遊戯

「タタタタタタタタッ！」

サイトが来たよつだ

俺と死靈達（死神裝飾）は陰に潜んでいる

「うわーー！」

サイトが浮いた

と、思つたら魔法で浮かせただけなんだよねー

「そろそろ行く？」

コクコク×6

死靈達も出番が欲しい？ ようで頼いた

「じゃあ、行けー！」

風が通るような音を立てサイトの回りを六つの骸が飛び交つ

「え？ なんだこれーーー！」

「な、なんだいこれはーーー？」

「うわ…」

「・・・」

サイトは死神を想像したであろうか、驚きながら顔が少し青くなっている

ギーシュは突然の事で驚いている

モンモランシーは何か神秘的な物を見た目をしている確かに魔法で浮かせたらお出迎えなんてそうなるだろつまあ、サイトは逝きそうで怖がっているが

で、ルイズは…固まつてた。動かざる」と山の如し見たいな感じ微動だにしないよ

そろそろかな

俺は死靈のいる所へ向かう

そして

「はい、今日は終わり。戻つて戻つて

シユツ…

と、骨が擦りあつよつ音をして静かに消え入るよつに消えた

「…………」

「痛つ！」

突然俺が現れて消えたので啞然している
現にサイトは魔法を解かれて落下した。

ドンマイで思つたのは氣のせいだらう

「君は確か… チェルシーの使い魔だったか

「ひひ

…………
あつき、燃やしたくなもつ當ったのか。

「あれって魔法なの？」

モンモランシシーが声を掛ける

「ひひ

あまり、露骨に自分のこと話すといけない

「あんた、あつき龍みたいなもん出してたじゃない

あ、ルイズ復活した

「あれは、…………」

「いつかどうか悩んでいた

「あ、見つけましたよー。」

「ご主人が俺を見つけてやつてきた
あれ？ そんな時間経つてたつけ？」

「ご主人・・・」

「もう、こないと思つたら外にいたのね」

「そんなに時間経つた？」

「え？ 10分くらいよ」

それは、長いのか？

「さ、帰りましょ」

「分かつた」

すいません、なんでもありません。

その笑顔が素敵です

言う事聞きます（ある程度）

俺達はぽかんとなつているルイズ達を無視して帰った

チエルシー部屋。

はい、着きました

なにをしようか迷っていたら
ご主人が

「ねえ、名前付けないといけないよね？」

確かに……この名前は無いからな

コクコクと頷く

チエルシーはパツと思いついたような顔をする

「よし、あなたの名前は『クロ』にする！」

ダンッ！と俺に向かつて言つ

その時に一つのスクスプロジェクションが揺れたのをしつかり見た

しかし、クロか…変な名前付けるよつはいいか

「名前嫌だった？」

返事を待っているようで俺に尋ねる

そんな上田でみないで下さい。罪悪感がします

「大丈夫問題ない。俺の名前は『クロ』」

「よかつた。嫌われないで…」

よっぽど、その名前に自信があったようで安堵している
・・・あれで断つたらどうなるんだろうか…

思つてたことがある

「『人』

「なにクロ？」

「俺、どこで寝るの？」

「え？私のベッドと一緒に、その…寝るのよ
少し照れながら囁つ

「いいのか？」

「いいって、それに床だと寝れないでしょっ~」

確かに、サイトのあれは可哀そつに見えた

「分かつた」

早速チエルシーはベッドに入る

俺は続いて入る

それほど狭くなくまだ余裕があるようだ

今日その日は緊張して中々寝つけなかつた。
主人の匂いが素晴らしいとここに記す

遊戯（後書き）

次話で会いましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4343ba/>

龍の血を引く使い魔

2012年1月12日22時58分発行